

I 研究の概要

1 研究主題

主体的に探究する児童の育成

～共に学び合い、伝え合う国語科の授業づくりを通して～

2 研究主題設定の理由

本研究は、本校で3年間続けてきた「協働的な学びのよさが分かり、生かそうとする児童の育成」における実践と成果、そしてそこから導き出された課題を分析した上で、新たな主題を設定したものである。前年度までの研究では、児童が協働的な学びのよさを実感し、教師側も探究的な学びのサイクルを意識した授業を構築できるようになってきた点で確かな成果が見られた。また、児童が対話を通して互いの学びを支え合うことで、一人では到達し得なかった考えや理解を獲得する姿も見られたことは、協働的な学びの価値を明確に示した。しかしその一方で、児童が協働的な学びで得た経験や視野を、自身の学びや日常生活における課題解決に主体的に結び付けていく姿勢、そのような自発的な学びのプロセスを促進する上での教師のファシリテーターとしての役割には、引き続き検討すべき課題が残った。これらの点を踏まえ、本年度は「めあて学習」や「協働的な学び」を継承しつつも、児童一人ひとりが自己の学びを客観的に振り返りながら、主体的に探究活動に取り組む姿の育成を目指し、研究を推進する。

本研究における「主体性」は、『学習評価の在り方ハンドブック 小・中学校編』令和元年6月（国立教育政策研究所）を参考に、「自己調整力」と「粘り強さ」という二つの中心的要素の相互作用によって育まれるもの」とし、単なる自発的な行動に留まらず、児童が自らの学びを能動的にコントロールし、目標達成に向けて持続的に取り組む能力と定義する。自己調整力とは、自身の学習プロセスを客観的に認識し（メタ認知）、理解度を評価し、必要に応じて学習を調整する能力を指す。一方、粘り強さとは、困難な課題や未解決の問題に直面した際に、諦めずに試行錯誤を続け、目標達成に向けて努力を継続する能力、つまり、GRID（やり抜く力）に代表される非認知能力の一側面である。これらの力が結びつくことで、児童は①自らの学習目標を設定し、②計画を立て、③実行し、④振り返りをするという一連の探究サイクルを主体的に回すことが可能になると考える。これは、世田谷区が推進している「せたがや探究的な学び」のサイクルとも密接に関連している。これら探究の各段階において、教師が適切な支援を行うことで、児童の主体的な学びを最大限に引き出すことを目指す。

この理念を具現化するため、本研究の初年度は、全ての教科の基盤となる国語科に焦点を当てる。国語科を研究対象とする理由を以下に示す。

第一に、国語科の学習活動は、児童の主体的な探究活動を直接的に促す力を持っている。物語文の読解では、登場人物の心情や物語の背景などに対して「なぜ？」と問いを立てることで、児童は自らの視点で物語を深く読み解こうとする探究的な姿勢を育む。また、自分の考えをまとめて友達に伝える活動では、伝えたい内容を的確に表現するために言葉を選び、構成を工夫する必要がある。こうした活動を通して、児童は自分の考えを整理し、学習の進め方を振り返ることで「自己調整力」を養い、自分の問いを解決するために試行錯誤を重ねる「粘り強さ」も育まれると考える。第二に、国語科の「言葉による見方・考え方」こそが、探究活動と学び合いの基盤となるからである。文部科学省の『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』にもある通り、国語科は「言葉による見方・考え方を働かせ」ることを重視している。この「言葉」を扱う力は、問いを立て、情報を収集・分析し、自分の考えを論

理的に表現するといった、探究活動のあらゆる段階で不可欠なものである。そして、国語科における言語活動は、自分の考えを明確に表現し、それを他者と「共に学びあい、伝え合う」ことで、協働的な活動を促し学びをさらに深める場を生み出す。最後に、国語科で培われた思考力や判断力、表現力等は、他教科にも応用できる汎用性をもつからである。国語科の授業で築かれた「主体的に探究する」姿勢と能力は、例えば社会科での資料の読解、算数科での問題解決プロセスの理解など、あらゆる教科の学習に横断的に活用できる。国語科での学びを深めることは、児童の学び全体を底上げし、本校の教育目標達成に大きく貢献すると考える。

本研究では、小学校6年間の国語科の学習指導要領を読み解き、各学年で育成すべき力の系統性を明確にした上で、物語文を題材とした授業を実践し、児童の主体的な学びの育ちとそのプロセスを支援する教師の役割を検証していく。

3 研究の構想図

